



TITLE:

## 費用概念考察の出発點

AUTHOR(S):

熊本, 吉郎

---

CITATION:

熊本, 吉郎. 費用概念考察の出発點. 經濟論叢 1931, 33(1): 146-153

ISSUE DATE:

1931-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130048>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號一第

卷三十三第

行發日一月七年六和昭

（禁轉載）

## 論叢

效用經濟と勢力經濟……………文學博士 高田 保馬  
新地租の不公平と其匡正……………法學博士 神戶 正雄  
稅率論……………經濟學博士 汐見 三郎

## 時論

稅制整理の目標……………法學博士 神戶 正雄

## 研究

收穫高と米價との關係……………經濟學士 八木 芳之助  
東海道濱松宿に關する一考察……………經濟學士 大山 敷太郎  
アルフレッドの工業立地理論に就て……………經濟學士 菊田 太郎  
米の生産地相場相場との相關々係……………經濟學士 谷口 吉彦

## 說苑

グラスの工業發達階段說……………經濟學士 堀江 保藏  
費用概念考察の出發點……………經濟學士 熊本 吉郎  
國勢調査てふ用語……………經濟學士 岡崎 文規

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## 費用概念考察の出発點

熊本吉郎

費用の概念を考察するに當つて、其の出発點として、費用を財の數量上の消費と夫れが貨幣價值によつて表現されたもの、消費とに區別して闡明すべきであると云ふことは、戦後屢々問題とされて居たのであるが、最近それを明白に力説して居る學者にフランクフルト大學のロレンツ博士がある。以下私は博士の所説を紹介し、併せて、此の點に關し簡單なる私見を述べて見たいと思ふ。

## 一

歐洲大戰中及び戦後の獨逸に於けるインフレーションの影響により、費用を考察するに當つて、夫れが數量的方面を重要視する傾向が現はれ、其の結果數量的部面のみを偏重する學者さへ生じたのであるが、最近は又其の反動として、貨幣價值にて表現されたものを重要視する學者が現はれて居る。然るに、ロレンツ博士は此の兩者の一面のみを偏重することを不可とし各々を獨立に分離し、而も相關連せしめて同時に考察

することは、經營經濟學の中心問題たる費用概念を解明するに當つて、最も重要であり、缺く可からざるものであるとし、先づ何故に費用を前述の兩部面に分解する必要があるかに就いて、次の如き例を示して理由づけんとして居る。<sup>4)</sup>

即ち同種同質の生産物が異つた時點に於て生産され其の場合々に原價計算が行はれた結果、次の如くに、其の費用が構成せられて居たと假定する。

1)	材料 5kg. ②	¥ 6.00.....	¥ 30.00
	勞働 5時間 ②	¥ 1.00.....	¥ 5.00
			¥ 35.00
2)	材料 6kg. ②	¥ 5.00.....	¥ 30.00
	勞働 5時間 ②	¥ 1.90.....	¥ 5.00
			¥ 35.00
3)	材料 6kg. ③	¥ 4.50.....	¥ 27.00
	勞働 5時間 ③	¥ 1.00.....	¥ 5.00
			¥ 32.00
4)	材料 4.5kg. ④	¥ 7.00.....	¥ 31.50
	勞働 5時間 ④	¥ 1.00.....	¥ 5.00
			¥ 36.50

1) Mengenverbrauch

2) Geldwertausdruck

3) Dr. St. Lorentz, Der Kostenbegriff, Z. f. B. 1931. Heft 1, 2.

4) 上掲雜誌, Heft 1, S. 28.

此の例によれば各生産物の總原費は次の如くである。

- |         |           |
|---------|-----------|
| (1) 三五圓 | (2) 三五圓   |
| (3) 三二圓 | (4) 三六・五圓 |

今此の總原費計數に基いて、經營の經濟性に就いて即ち經營の目的が可及的最少の手段を支出することによつて達せられて居るか否かに就いて、充分なる證明が與へ得られるであらうか。即ち財の數量上の消費を見れば、前例では、

- |         |           |
|---------|-----------|
| (1) 五 疋 | (2) 六 疋   |
| (3) 六 疋 | (4) 四・五 疋 |

を示して居る。之によれば(4)の場合が數量上の消費が最少であつたが故に、最も經濟的に行はれた(wirtschaftlichsten arbeiten)と云はれ得る。之に反し、貨幣價值により測定する時は、(3)の場合が最も經濟的に消費された様に見える。併し實際には(3)の場合は貨幣價值計數では最少なるにも拘らず、經濟的には好くなく、却つて悪いのである。何故ならばかゝる生産が行はれる時に、(3)の場合では材料は六疋消費されて居るのであるが、(4)の場合が示めす如くに、只四・五疋でも

#### 費用概念考察の出發點

事足りたのではなかつたであらうか。若し、四・五疋の消費により得るとすれば、(3)の場合は次の如くなる。

材料	4.5kg.	③	¥ 4.50.....	¥ 20.25
労働	5 疋 4 圓	④	¥ 1.00.....	¥ 5.00
				¥ 25.25

斯く二五・二五圓で生産され得る生産物に對し、不經濟的技術的勞作の行はれたが爲に、三二圓の原費が生じたのであるが、これ貨幣價值のみを一面的に見ることを許さない事實を示すものである。

従つて上述の四の例は、原費に對し貨幣價值で表現されたものは、二つの成分、即ち、一は量であり、他は價值——こゝでは一應かゝるものとして示す——から影響を與へられて居ることを物語るものである。

斯かる理由により、ロレンツ博士は費用の量的並に價值的性質を區別し、分析することを必要とし、費用概念を解明するに當つて最初に闡明すべきものとする而して斯かる費用の兩部面に名稱を與へる。<sup>6)</sup>從來商業上の實際に於て、Aufwand と Kosten なる語が用ゐられて居るのであるが、其の内容は殆んど同一で、共

5) 博士は不用意にも、此處でかかる語を用いて居るのであるが、其の眞意を了解するに苦しむ。  
6) 前掲雜誌, Heft 2, S. 81.

に消費を表象するものとしてであり、何等異なる概念内容を持つものではない。併し實際上斯かる共通の意義を持つ異なる語があるならば、夫れをこゝに適用することが最も近道であり、適切であるとして、博士は費用の量的方面より見られたものを Aufwand と稱しそれが價值的方面を Kosten と稱する。即ち費用は Aufwand と Kosten の兩部面に分解して考察せねばならないと説くのである。

更に博士は次の如く説明する。<sup>7)</sup>「費え」(Aufwand)は經營内部に於て成立する。即ち「費え」は外部の影響を何等受けない。「費え」は所與の工場或は組織に従つて見積數の形式ではあるが、原則上不變的性質(konstante Natur)を持つ。即ち一定の生産方法及び生産物を前提する限り、一定の材料、勞働時間の最少限度が維持されなければならない。更に其の實數<sup>9)</sup>は合理的經營の如何に依存する。

之に反し「費用」(Kosten)は調達市場の側の成分、即ち價格の作用を受ける。即ち經營外の要素、而も夫

れは商品、或は貨幣の需要供給によつて決定される可變性の要素が作用する爲に「費用」は可變的性質を持つのである。故に原價計算單位に對し、「費え」は勿論同一量のものに止まり得るが、併し「費用」はそれにも拘はず一定ではあり得ないと云ふ事が出來よう。

費用が影響を受ける二つの成分の中の一は一定の前提の下では不變的性質のものであり、他は可變的性質のものである、と云ふ事實を認識することによつて、原價計算の實地に重要な結論を與へる。即ち原價計算(Kostenrechnung)は出來る限り根本的に量的方面と評價的方面とに區別して計算すべきことである。従つて同種商品、同質、及び同じ生産方法を前提する限り量的消費は各場合同一に決定され得るが、只其の時々の再取得價格を其の場合に應じて乗せねばならない、と博士は説くのである。

## 二

上述の如く、博士は費用に就いての解明の出發點として、Aufwand と Kosten とを分離して考察するが、

7) 前掲雜誌, Heft 2, S. 85.  
8) Sollziffer  
9) Istziffer

然らば他の諸經營學者(特に獨乙に於ける)は如何なる態度をとるかに就いて、一應ロレンツ博士の示す所に依れば、費用を價值概念として、むしろ強く把握する學者には Liefmann, Nicklisch, Wall, 及び Leiner があり、之に反し費用概念を規定するに當り、主として量的消費の立場より見る學者には Gottle-Ohlendorf 及び、精確には認め得られないが、Schmalenbach がある。而して比較的明白に、兩立場を分離し、而も何れにも偏することなく考察する學者には Voigt, Schmidt, 及び Gersner がある。今私は諸學者の説を紹介し、吟味する餘裕がないから、こゝでは一應省略するが、博士の示すが如くに、數量的方面を偏重する學者、或は數量的方面並に價值的方面を分離し、而も對等に考察する學者がロレンツ博士以外にも存在するのを知る。

斯く費用の概念を考察するに當つて、先づ、夫れが數量的部面と所謂價值的部面(貨幣價值によりて表現されたる)の兩部面に分離し、兩者を對等の重要さを以て闡明すると云ふ事が、經營經濟上如何なる意義を有す

#### 費用概念考察の出發點

るか、特に數量上の考察は如何なる經營經濟上の問題を解明するに役立つか、又如何に數量上の考察が可能であるか。此の點に關し、以下簡単に私見を述べて見たいと思ふ。

我々が財を問題とする限り、夫れは數量的方面からと貨幣價值によつて表現された部面からと考察され得ることは疑なく、必ずしも、特に新しい事柄でも、亦強く主張さるべき問題でもあり得ない。こゝに問題となるのは經營經濟學の立場に立つて、一企業の費用を考察するに當つて、必ず上述の兩部面を分離し、而も互に關連せしめ、同様に重要視して解明することが何故に必要であり、如何なる意義を有するかの點にある。此の點を吟味する爲には、先づ經營經濟學は何を問題とするかに就いて闡明せねばならない。併し私はこゝにそれを詳論することを許されないが故に、單に其の結論のみを示めせば、經營經濟學は一企業の資本を対象とし問題とする學問であると信ずる。而して企業の目的は資本の増殖にある。即ち最大の利益を擧げること

10) 前掲雜誌, Heft 1, S. 29—39.

11) ここに云ふ數量とは Menge の謂にして、Wert に對する Menge なることに注意を要す。例へば、何貫、何尺、何升、と云ふが如き意味に於ける數量であつて、それを正確に表現する日本語を見出し得ないので、こゝでは、假に數量なる語を用ふる。

とにあると思ふ。

今一企業（こゝでは一應狹義の生産企業に限定する）に於て、利益を舉げんが爲に生産を行ふ場合に、費用が生じ、而して、其の費用と生産されたものとを比較して生産されたものが大であるならば其處に利益が生ずるのである。其の場合、初めて企業は經濟的に活動せしや否やが決定される。而して、費用と生産されたもの、何れが大であるかを測定する尺度は一體何であるか。物それ自體の數量を以てそれが決定され得るであらうか。費消せられたもの、數量と生産されたもの、數量とが、る意味に於て如何なる關係にあり、如何なる關連を持ち得るであらうか。更に若し其の數量が比較され得ると假定して、而も、數量上最少の材料を以て最大の生産物が得られ得たと假定して、其處に如何なる利益が生じたと云ひ得るのであらうか。

私は生産の數量的方面が問題とされる限り、それは經營技術上の問題ではないかと思ふ。少くとも經營經濟上の問題とされる爲には、一定の方向、即ち資本の

増殖なる點が其の上に加味されねばならない。併し、それだからと云つて生産の數量上の問題は經營經濟上の問題に何等關係がないと云ふのではない。即ち生産の數量的方面は經營經濟上の技術的基礎となるに過ぎないものであらうと思ふ。

斯く、費用の數量的方面は技術上の問題であり、只原價計算上重要な役割を持つにも拘らず、それは經營經濟上では、何等重要な役割を持つものでなく、假令、夫れが經營經濟上に關連を持ち得るとしても、只間接的に過ぎない。従つて經營經濟の立場よりすれば數量は問題となり得ず、それよりもむしろ、所謂經濟學上の價值が重要な問題であらう。即ち我々は如何なる價值によるべきであるか、其の價值は如何なる計算單位によりて現實に取扱はれ得るか、現代の貨幣經濟時代に於て、一般的計算單位たる貨幣によつて、夫れが計算されることは如何にして可能であるか、更に一方價格は如何なる價格によるべきか、例へば取得價格によるか再取得價格によるべきか、價值と價格とは

如何なる關係にあるか、此等の點を闡明することが經營經濟上の費用の概念を考察するに當つて先決問題であり、斯くて初めて、費用と成果とが比較考量せられ、經營經濟上の中心問題たる、利益、即ち資本の増殖が明白にされ得るであらう。尙、價值と價格、貨幣の機能に就いて、ロレンツ博士もかなり詳論して居るが、私の考ふる所に依れば、あまり見るべきものもないと思ふし、何れ、稿を改めて研究して見たいと思ふから、こゝには省略する。

次に費用を考察するに當つて、數量上 (Menge) より見ることが可能なりや否やを吟味しなければならぬ。費用を經營經濟上より説明する時、夫れが數量的方面より見ることの重要な意義を有し得ないと云ふことは上述せる如くであるが、更に數量上より考察することとを不可能とする理由がある。次に其の主要なるものを指摘して見よう。

先づ、一企業が生産を行ふ場合に、其の原料は一種ではあり得ない。必ず數種類の原料を用ひて居ること

#### 費用概念考察の出發點

は言ふまでもない。斯くの如く、現代の生産に於いて數種乃至數十種の原料が用ひられるとするならば、其の各々の數量は一體如何なる關連の下に把握することが出来るであらうか。數量の比較され得るのは同質の物に於いて、あることは今更述べる迄もない。博士は上例に於て、唯一種の材料のみを問題とされるが故に一應其の數量は比較し得るのである。併し、現實に於いて、一生産が行はれる場合に、單に一種の原料のみによる場合が考へ得られるであらうか、更には、同一種目の原料に於ても、時を異にする場合、必ず同質のものであり得るであらうか。

更に極端な例を示せば、一の生産が行はれる場合に、原料  $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdots$  が用ひられ、或場合には、 $A$  が一疋、 $B$  が五米、 $C$  が一〇リットル費消され、他の場合に、 $A$  が二疋、 $B$  が一〇米、 $C$  が五リットル費消された場合に、何れが、數量上少く費消されたと云ふ事が出来るであらうか。

斯くの如く、一の生産が行はれる場合に少くとも異

12) 企業に於ける費用の種類、其の組合せ等の問題は次に來るべきものであるがこゝでは暫く省略する。

13) 前掲雜誌 Heft 1, S. 39-46.



質の數種の原料が使用され、而も數量上の單位としては、個數、重量、尺度、容量等が用ひられ、均しく個數を採るとしても、何個、何袋、何箱、何樽、等、又重量にても何噸、何ポンド、何貫、等、又、電氣、瓦斯の如くにキロワット、馬力、立方呎等と甚だ異なる多數の單位が用ひられるのであつて、斯かる點から見ても數量上の比較が全く不可能であることは充分察知せられ得るであらう。

更に費用を數量により測定することの不可能なる點は、一般に使用財産と稱せられる、機械建物等に就てある。機械或は建物が費用として、製品の原價を構成することは、ロレンツ博士も詳述して居る所であるが、其の數量は如何にして測定され、如何なる單位により得るものであらうか。博士が費用を考察する時には數量上の方面と、貨幣價值によつて表現された部面とを分析し、兩方面より考察すべき事を述べながら、かゝる點に就いて何等の究明をも試みて居ないのは何故であらう。私は其の點遺憾に思ふ。

又既に指摘せる所であるが、單に費用の數量を比較して見て、それが少であると云ふのみで、其の生産が經濟的に行はれたと、博士は不用意にも說かれてゐるのであるが、これ、博士の觀察の疎漏を遺憾なく示すものであると思ふ。

更に博士は「費え」は一定の前提、即ち生産方法、及び生産物が一定せる限り、夫れは不變的であり、それに反し、「費用」は企業外の影響を受ける爲に可變的であると説く。如何にして「費え」が一定の前提の下で、同數量が消費され得ると正確に云ひ得るであらうか。更に不變的性質とは何を根據として稱するのであるか了解に苦しむ。

### 三

上述せる所を以て、簡單ながら、ロレンツ博士の所說に就いて紹介し、卑見を述べたのであるが、從來、費用に限らず、經營經濟上、或は經濟上財貨を考察する場合に、かなり數量が問題視せられるのを屢々見受けるのである。それは其の立場を無視するか、或は觀

察の不用意から生ずる結果であらうと信ずる。

吾々が費用を考察するのは、經營經濟的立場に立つものであり、其の限りに於て費用が問題となるのは成果との關係即ち、損益に關してである。而して費用の數量的考察は技術上の問題に過ぎないものであり、而も數量上から觀察することは不可能であり、經營經濟の立場から無意義であると信ずる。我々が問題とすべきものは價值であり、現代經濟社會に於いて、それが何故に、如何にして一般的計算單位たる貨幣價值によりて表現され得るか、價值と價格は如何なる關係にあるか、或は現實の問題として、費用は如何なる價格、例へば時價によるべきか、取得價格によるべきか、その何れによるが完全なる損益算定に最も接近し得るかが出發點として根本的重要なる點であらう。

經營經濟上費用を解明するに當つて、其の數量上の問題は、直接意義を持つものでもなく、又不可能であるにも拘はらず、兎角、數量上の問題が取扱はれんとするが故に、其の典型的なる一例を紹介し、併せて簡

單ながら卑見を述べたのであるが、薄學賤才の爲、重大なる誤謬を犯せるやも知れず、諸賢の吐正を請ふ次第である。(一九三一・六)